

平成 26 年 度

慶應義塾大学入学試験問題

文 学 部

地 理 歴 史
(世 界 史)

- 注 意
1. 受験番号（2ヶ所）と氏名は，所定欄に必ず記入してください。
受験番号は，所定欄の枠内に一字一字記入してください。
 2. 解答は，必ず解答用紙の指定の箇所に記入してください。
 3. 解答用紙は，必ず机の上に残しておいてください。
 4. この問題冊子は，表紙を含めて11ページあります。試験開始の
合図とともに全てのページが揃っているかどうかを確認してく
ださい。ページが抜けていたり，重複していたりする場合には，
直ちに監督者に申し出てください。

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

13世紀末にアナトリア北西部で成立したオスマン朝は、周囲のビザンツ帝国やトルコ系地方政権と戦って支配領域を徐々に拡大させた。14世紀前半にアナトリアを旅したイブン＝バットゥータは、当時のオスマン朝の首都である（ A ）を訪れ、そのスルタンをアナトリアで最も富強な人物と評した。14世紀中頃、ビザンツ帝国の内部紛争に乗じてバルカン半島への進出を開始したオスマン朝は、交通の要衝であるアドリアノーブルを制圧したのち、1389年に（ B ）の戦いでセルビア・ボスニアなどのバルカン連合軍を破り、バルカン半島の大部分をその支配下においた。さらに、1396年のニコボリスの戦いでハンガリー王ジギスムントの指揮する十字軍に勝利し、ヨーロッパ勢力の抵抗を退けた。アナトリアの一地方政権に過ぎなかったオスマン朝がのちに大帝国に発展した背景には、こうしたバルカン半島進出の成功があったのである。

オスマン朝の第4代スルタンであるバヤジット1世は、バルカン半島とアナトリアの大部分を支配下におさめたが、1402年、中央アジアから現れたティムールの軍勢に（ C ）の戦いで大敗した。まもなくティムール軍は中央アジアに引き返したが、アナトリアではバヤジット1世によって滅ぼされた地方政権が復活し、政治的混乱が続いた。15世紀中頃までに国力が回復したオスマン朝は、1453年に念願のコンスタンティノーブル征服を果たし、ビザンツ帝国を滅ぼした。この功績によって「征服者」と称されたメフメト2世は、6世紀前半にビザンツ皇帝（ D ）によって建設されたハギア＝ソフィア聖堂をモスクに改装し、この都市がイスラーム王朝の支配下に入ったことを内外に示した。また、信仰・言語・文化を問わず、あらゆる人々の移住を奨励し、ときには強制的な移住政策も実施した。こうしてこの都市は世界有数の国際的な大都市に発展した。

1512年にオスマン朝のスルタンとなったセリム1世は、イランやアラブへの領土の拡大に積極的な姿勢をみせた。シーア派を国教とするイランのサファヴィー朝に勝利したのち、スンナ派イスラーム王朝であるシリア・エジプトの 맘ルーク朝を滅亡させ、オスマン朝をスンナ派イスラーム世界の盟主の地位に高めた。スレイマン1世は、領土の拡大と支配体制の中央集権化によって王朝の最盛期を現出させた。1526年に（ E ）の戦いでハンガリー王ラヨシュ2世を破り、その後、オーストリアに侵攻してウィーンを包囲したことでヨーロッパ諸国を震撼させた。また、1538年にはイオニア海のプレヴェザ沖でヴェネツィア・スペインなどの連合艦隊を破り、地中海における絶対的優位を確立した。国内では「オスマンの平和」のもとで人口が増加し、農業や商業が活発になった。都市では手工業も発展し、（ A ）の絹織物のように各地で特産品が現れた。

オスマン朝の急速な領土の拡大を支えたのは、常備軍と在地騎兵を中心とする強力な軍隊であった。常備軍の中核をなすイエニチェリは、敵対する周辺諸国に脅威を与えただけでなく、国内でも特権集

団を形成し、政治や社会に大きな影響力をもった。このイエニチェリを1826年に全廃し、近代化改革を進めたスルタンは（ F ）であった。

16世紀末以降のオスマン朝は、スルタン権力の低下や財政難などに伴う政治・経済・社会の混乱に度々直面したが、17世紀後半になると再び積極的な対外政策を展開した。しかし、1683年に敢行した第二次ウィーン包囲に失敗すると、1699年にオーストリア・（ G ）・ヴェネツィアとカルロヴィッツ条約を締結し、ハンガリーやトランシルヴァニアなどの領土の割譲を余儀なくされた。こうしてヨーロッパに対する優位を失いつつあったオスマン朝では、ヨーロッパ世界の知識や技術に強い関心をもつ者が現れた。1703年にスルタンに即位した（ H ）の治世の後半には、ヨーロッパの文芸・地理・医学などが積極的に移入された。この文化爛熟の時代を「チューリップ時代」と呼ぶ。

1768年、オスマン朝は（ G ）への干渉を強めるロシアに対して戦争を開始した。しかし強力なロシア軍の前に大敗し、1774年のキュチュク＝カイナルジャ条約において、黒海北岸の（ I ）国に対する宗主権を失い、ロシア商船の黒海での自由航行権を認めなければならなかった。他方、国内では（ J ）と呼ばれる地方有力者が在地勢力として影響力を強めた。彼らは徴税請負や大農場経営を経済的な基盤として地方社会を支配し、オスマン朝の中央集権的な支配体制に動揺を与えた。こうした対外的な失政や地方分権化の動きを受け、18世紀末から19世紀前半にかけて（ F ）に代表される開明的なスルタンが近代化改革を断行したのである。

Ⅱ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ O ）に最も適切な語句を記入しなさい。

古代末期の地中海世界ではスカンディナヴィアについてほとんど知られることはなかったが、中世初期に形成途上にある西ヨーロッパの重心が北へと移動するにつれ、その地域との接触の機会も増えていった。しかし西ヨーロッパがスカンディナヴィアの人々の存在を強く意識するようになったのは、なによりもシャルルマーニュの治世にヴァイキング（ノルマン人）と呼ばれる人々が大規模な襲撃・略奪を開始したのちのことであった。シャルルマーニュは、自らが埋葬されることになるドイツ西部の地（ A ）に主要な宮廷をおき、西ヨーロッパの多くの地域を支配下におさめたが、その帝国の統一は続く時代にヴァイキングの襲撃のなかで崩壊していった。ヴァイキングは、夏の間、武装集団として吃水の浅い機動的な船で船団を組んで襲来し、ブリテン諸島や北フランスを中心にしばしば内陸部に至るまで、都市や農村、教会や修道院を略奪した。彼らは当初冬が近づくと戦利品を携えて故国へと帰ることを常としていたが、やがてその多くが侵入した地で越冬し定住するようになった。とくにブリテン諸島でのヴァイキングの定住は著しく、イングランドではその北東の半分が彼らの支配地となるほどであった。そのため、（ B ）はヴァイキングの首長グスルムと協定を結び、その地の支配を一時的であれ認めねばならなかった。また、フランスでは、防衛上の配慮から、シャルル単純王がヴァイキングの首長（ C ）にノルマンディー地方の領土を授与するということが生じた。この地はやがてウィリアム征服王によるイングランド征服の拠点となった。

ヴァイキングの活動は西ヨーロッパの略奪に限られなかった。彼らはバルト海を東へと進み黒海へとつながるロシアの地域で商交易を営んでいた。彼らのなかには、さらにビザンツの地で皇帝に仕える者もいた。この地域の活動でとくに重要なのは、ルーシと呼ばれるノルマン人一派の首長リューリックが東スラヴ人の地（ D ）で王朝を開き、さらにその一族オレーグが（ E ）を建国したことであった。ヴァイキングの他の一派は、北海に進出した。彼らはブリテン島だけでなく、さらにアイリッシュ海へと進み、いまだ都市化が進んでいなかったアイルランドでダブリンなどの交易地を設立した。この一派は、さらに西へと進み、アイスランドや（ F ）へと進出し、その一部はこの時代さらに北アメリカに達していたと考えられている。（ F ）は、その後長くノルウェーの支配下におかれたが、近代に入りデンマーク領となり、1979年までその植民地であった。

ヴァイキングは、本来多神教を奉じる民であったが、10世紀以降次第にキリスト教を受け入れていった。デンマークでは、ハラルド青歯王の改宗ののちその流れが確実となった。11世紀前半には、（ G ）がデンマーク、ノルウェー、イングランドを含む「北海帝国」の支配者となったため、この地域でラテン＝カトリック的な伝統の流入が促進され、さらにイングランドの聖職者の助力によってノルウェーのキリスト教化も進められた。1103年頃にはデンマークのルンドに、1153年頃にはノルウェーのトロンヘイム（ニダロス）に、1164年にはスウェーデンのガムラ＝ウプサラに大司教座が設立された。12世紀は、スカンディナヴィア3王国の輪郭が次第に明らかになってくる時期であったが、

各王権はこれらの大司教座の助力を得て国の統合を進めていった。とりわけデンマークとスウェーデンの王権は、12世紀から14世紀にかけて、ドイツ騎士団とともに、征服活動によりバルト海東部地域へと勢力を伸ばし、その地のキリスト教化に尽力した。ちなみに、エストニアの（ H ）に司教座が設立されたのは、1219年のデンマーク王ヴァルデマー 2 世による征服の結果であった。また、スウェーデンはこの時期フィンランドに支配を広げていった。

バルト海地域全域がこのような形でラテン＝カトリック世界に取り込まれていく過程で、新たな経済的發展が見られた。それは北西ドイツの商人を中心に形成されたハンザ同盟であった。スカンディナヴィア 3 王国の諸都市も様々な形でそのなかに組み込まれることになった。ハンザ同盟の起源は、12世紀中葉にザクセン大公ハインリヒ獅子公の援助のもとで（ I ）が再建されたことに遡る。

（ I ）を中心としたドイツ商人は、バルト海地域にヴィスビーなど拠点となる多くの都市を確立し、交易路を確保し、バルト海交易を支配するようになった。交易路の東はロシアの（ D ）あたりまで達し、ハンザは、その地から毛皮、蜂蜜、蜜蝋、琥珀などを輸入し、当時の西ヨーロッパの主要な国際市場のひとつであったフランドルのブリュージュを中心にロンドンなどへと運んでいった。また、ドイツ騎士団などの活動により東方植民が進むと、13世紀前半からケーニヒスベルクやダンツィヒなどの都市が建設され、後背地で産出された穀物などが積み出され、（ I ）経由でブリュージュやスカンディナヴィアなどへと輸出された。13世紀中葉以降、ストックホルムや（ J ）などの都市が確立され、ハンザの支配はスカンディナヴィアへと及んだ。その地で産出されたスウェーデンの銅や鉄が、バターや毛皮とともにブリュージュなどへと運ばれた。またスコネ地方の鯨と（ K ）の鱈もハンザの重要な輸出品だった。（ K ）は、ブリュージュ、ロンドン、（ D ）とならび、ハンザの主要な商館がおかれるほど重要な交易拠点であった。ハンザは、これらの地域で得られた商品にかわり、ブリュージュで仕入れた毛織物などを供給していた。また、スコネには、ドイツのリューネブルク産の塩を水産加工用として供給していた。このように、ハンザ商人が扱った商品は、当時の地中海の奢侈品を中心とした交易とは異なり、日常的な生活必需品や原料であり、互いの地域の生活や生産活動を支える物が主体であった。

14世紀までにバルト海地域でのハンザによる交易の独占は確固たるものとなっていたが、その世紀の後半以降ハンザの特権はヨーロッパ各地で統合を進める諸権力と各国で成長した商人層によって脅かされるようになった。最初の大きな危機はデンマークとの争いであった。デンマークはスカンディナヴィア 3 王国のなかでもハンザの影響を受けることが最も少なかった強国であり、1361年にはヴァルデマー 4 世がバルト海交易の重要な中継点であったゴトランド島のヴィスビーを占領した。これに危機感を抱いたハンザは、デンマークに反撃するため同盟軍を組織し、1368年にコペンハーゲンを占領・略奪し勝利した。その結果1370年にシュトラールズントでデンマークとの間に和平条約が結ばれたが、この条約は、それまでハンザが築き上げてきた諸特権を認めさせたものであり、その絶頂期を象徴するものであった。しかし、この輝かしい勝利にもかかわらず、ハンザの支配は、その後、とり

わけ15世紀以降確実に衰退へと向かった。東では、モンゴルの支配を脱しつつあったモスクワ大公（ L ）が（ D ）を支配するようになり、ハンザ商人の活動に制限をかけるようになった。西では、14世紀末にブリュージュを中心としたフランドル地方が相続によって（ M ）公国に帰属するようになったこともあり、百年戦争下でのこの地域の政治的状況も微妙に変化した。またデンマークも依然としてハンザの勢力を弱める機会をうかがっていた。1397年には、ヴァルデマー 4 世の娘（ N ）が主導し、最終的にデンマーク王エーリクを共通の君主とする同君連合である（ J ）同盟がスカンディナヴィア 3 王国の間で結ばれるが、デンマーク王権はその後もハンザの勢力を抑える機会をうかがっており、1426年に再び戦争が開始された。ハンザはこの戦いにも勝利し、1435年に再び条約が結ばれたが、デンマークはこれを尊重せず、その後もハンザに敵対的な政策をとった。

ハンザ同盟の盟主としての（ I ）の地位は、多分に、その交易が（ I ）・ハンブルク間の陸路を経由して行われたことに基づいていた。14世紀に入り、イングランド商人とオランダ商人が、エーアソン海峡の海上ルートを通してバルト海へ入り、バルト海東部の諸都市と直接接触するようになると、（ I ）とハンザ同盟諸都市の統一性と優越性は大きく損なわれることとなった。とりわけオランダ商人の脅威は致命的だった。15世紀の間にオランダ商人はバルト海での活動をますます活発化させ、その地での交易の自由を確保した。また、ブリュージュの国際商業都市としての衰退もオランダ商人に有利に働いた。中世末には、ブリュージュへとつながる水路に土砂が堆積し船舶の通行に障害がでたこともあり、毛織物産業の中心がブラバント地方へと移動し、スヘルデ川沿いの（ O ）が交易の中心地として発展し、オランダ商人がその地域での交易を支配するようになったのである。（ O ）の経済・交易の中心地としての役割は、オランダ独立戦争以後アムステルダムへと移り、オランダ商人はその地を拠点として商業上の覇権を確立していくことになる。16世紀前半にはハンザは拠点をブリュージュから（ O ）に移したが、その地域の交易を支配することはできなかった。ハンザ同盟は最後の総会が開かれた1669年まで存続したとみなされるが、「国家」を超えた共通の利害をもつ商人・都市の経済的同盟としてのハンザは、ヨーロッパ各地で発展しつつあった国家権力を前にして、すでにその意義を失っていたのである。

Ⅲ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

「最初にナポレオンありき」。あるドイツの著名な歴史家は、その大著をこのような言葉で書き始めている。

プロイセンの将軍だったザクセン・ヴァイマル公のもとで従軍したゲーテが、「今日、ここから世界史の新しい時代が始まる」と記した1792年9月20日の（ A ）の戦い以降、フランスの国民軍はドイツとの国境を越えて1794年秋までにライン左岸を占領、国民主権と封建的特権の廃止を宣言した。フランス革命戦争はナポレオンに受け継がれ、次第に侵略的性格を帯びつつも、その後20年以上にわたりヨーロッパに反封建理念を輸出することになる。

帝国騎士領を含め、1700以上とも目される「独立した主権」から成るドイツを統廃合し、近代「国民国家」の出発点に立たせたのはナポレオンだった。ライン左岸の仏領化が1801年にナポレオンと教皇ピウス7世との間で調印された（ B ）によって教会制度的にも承認されると、ライン左岸仏領化の埋め合わせとしてナポレオンが合意したオーストリアやプロイセンなどへの諸小邦の併合を実施するため、1803年神聖ローマ帝国の代表者会議が、宗教諸侯領を中心とする112の帝国諸侯領と41の帝国都市、すべての帝国騎士領の取り潰しと他邦への領地替えを決定した。

ナポレオンによるドイツ再編は、オーストリアとロシアの連合軍が（ C ）における三帝会戦で撃破された翌年の1806年7月、また新たな段階を迎える。西南ドイツ16邦がナポレオンを盟主とするライン同盟を構成し、オーストリアやプロイセンに対抗する第三の勢力となったからである。この16邦が神聖ローマ帝国からの脱退を宣言し、（ D ）が帝位を退いたため、帝国消滅が現実のものとなった。

占領以降フランスに20年にわたって編入されたライン左岸では、97の聖俗諸侯領が一掃されてフランスの行政が導入され、ナポレオン法典が「市民」の誕生をもたらした。ドイツ中北部にできたナポレオンの衛星国家における「フランス化」も、西南ドイツ16邦に抜本的な内政改革を促した。そのなかでも王国に昇格した（ E ）は、約230もの「独立した主権」を領域内に抱え込み、全国統一的な行政改革が焦眉の急となった。諸身分と諸地方の特権の廃止と法の下での平等、内閣制と官僚機構の確立、修道院領の国有化、諸宗派の同権をうたい、国民代表議会の設置を定めた「ドイツ最初の生粋の憲法」を1808年に採択して立憲君主政が誕生した。ナポレオンが近代国家形成の触媒として果たした機能は中部ドイツ経済圏の発展にも見られた。とくにナポレオンの義弟が支配したベルク大公国はドイツ最先端の工業地帯となり、のちにビスマルクと「近代化」を牽引するドイツ最大の軍需コンツェルンとなった（ F ）社の誕生を見る。

それに対し、ナポレオンに1807年、領土の大半を失う屈辱的な（ G ）条約を押しつけられたプロイセンは、独自に「上からの改革」を試みた。身分制社会の枠を壊せず、憲法と議会制を生み出せなかった点で（ H ）に遅れをとっていたが、1807年の「十月勅令」以降、行政改革、教育改革、

営業の自由化、国民軍創出に向けた軍制改革などを実施して、「国民国家」の礎を築いた。プロイセンはのちにライン左岸など、大陸封鎖を契機に逆に経済発展した地域を手に入れて、ドイツの経済的統一で主導的役割を確かなものとする。

ナポレオン戦争後、ナポレオンの樹立したライン同盟が解体されると、35君主国と4自由都市から構成されたドイツ連邦が設立され、保守的なオーストリアとプロイセンの協調的二元主義のもと、連邦内の自由主義的な国民主義を封じ込めた。国制改編後のドイツに「平和」が維持され、ナポレオンの大陸制覇がもたらした近代化はもはや不可逆的なものとなった。

他方、ナポレオン後のフランスではブルボン朝を復活させたルイ18世の治世に、カトリック系住民によるプロテスタント大量虐殺や共和派市民への白色テロが吹き荒れた。七月革命直前の5月にはブルボン朝最後の王（ H ）が、議会における反動派の復活を企図して6万の大軍による（ I ）占領を強行した。それが1962年の独立を経て現在に至るまで大きな禍根を残すことになる。

ドイツでは七月革命の影響で再び高揚した自由主義運動が弾圧され、近代社会への移行に伴う社会問題も先鋭化して、1848年に各地で革命的騒乱が発生した。ドイツの統一と自由はさらに先送りされた。その間に対抗関係へと移行したオーストリアとプロイセンの関係によりやく決着が見られたのは、プロイセンが挑発した（ J ）の帰属問題を契機とした1866年の普墺戦争においてであった。以後、ビスマルクの鉄血政策によりプロイセンを中心にドイツ統一が実現することとなる。いずれにせよ、ドイツの「国民国家」建設はあらゆる点でナポレオン抜きには考えられないのである。

IV 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を漢字で記入したうえ、（1）～（5）の各設問に答えなさい。

20世紀の中国ではそれまで地下に眠っていた遺物・遺跡が続々と発掘され、画期的な発見がもたらされたが、それは偶然を伴うものが多かった。その代表は殷墟である。1928年以来度重なる発掘調査が行われた結果、（ A ）省安陽市小屯を中心とした遺跡は殷代後期の都城跡であることが判明し、ボールに包まれていた王朝の存在が確かなものになった。そのきっかけは北京に住むある官僚が持病の薬として買い求めた古い動物の骨に文字が刻まれているのを見つけ、それが特定の場所から掘り出されたものであるのを突き止めたことであった。その文字は亀甲や牛骨に刻まれていたことから甲骨文字といい、占いに用いられたことから（ B ）とも呼ばれた。殷墟の発掘は殷の社会のしくみを明らかにした。殷は多数の邑が連合した都市国家で、王は祭政一致の実践を通して権威を維持した。ちなみに殷の最後の王である紂王は暴君であったため周に滅ぼされたと多くの史書は伝えている。だが、周の政権奪取を正当化するための理論である（ C ）によって彼の悪逆ぶりが誇張された嫌いがあり、実際はそれほどまでの暴君ではなかったとの見方が有力である。

1974年西安市の東北約30kmにある驪山の麓で等身大の武人像や馬像が発見された。これは野良仕事をしていた地元農民が井戸を掘ろうとしてたまたま見つけたもので、掘り進むにつれて2万m²に及ぶ3つの坑に8000体以上の兵馬の塑像が現れた。現在それは秦始皇帝陵を守る軍団ではなかったかと推測されている。始皇帝は他の六国のうち最後に残った（ D ）を滅ぼして全国を統一し、中央からそれぞれの行政区に官吏を派遣して直接統治を行う（ E ）制を実施、文字や度量衡を秦のものに一本化し、貨幣を（ F ）銭に限るなど、中央集権を確立した最初の君主として知られていたが、おびただしい数の塑像の発見は彼の権力の大きさを改めて感じさせた。

これより先の1956年には明第14代万暦帝の陵墓である定陵が発掘された。明朝皇帝の陵墓は北京市北郊にある明十三陵としてつとに知られてはいたが、発掘してみるとそれは莫大な経費をかけて完成させた地下宮殿であることが判明した。万暦帝の時代には白磁に色釉で文様を描いた（ G ）に代表される陶磁器産業が発展し、その初期には首席内閣大学士の（ H ）の努力によって幾分かの財政再建がはかられたものの、宮廷費や軍事費の増加によってたちまち財政破綻に陥り、顧憲成らが郷里の無錫に復興した（ I ）を中心に結成された党派と宦官派の対立による党争の激化によって政治は混乱を極めた。定陵の地下宮殿はその最中にあってもなお奢侈に執着し続けた明朝末期の皇帝の心情が十分に反映されている。

2009年暮、殷墟の近くで4年前に発見された陵墓が曹操のものであると中国当局が公表したことは記憶に新しい。曹操は（ J ）の乱鎮圧を契機に頭角を現わし、三国志の群雄のなかで魏を創始した人物として広くその名が知られている。中国ではこのようなビッグネームの墓が未盗掘のまま残っている可能性がまだあり、21世紀にも新たな画期的な発見が期待されている。

(1) 以下の文章で紂王について記したものをひとつ選んで記号で答えなさい。

- イ 王は末喜^{まつき}を寵愛し、徳を修めることに努めず、武力で百官を傷つけたので、彼らは我慢できなかった。……湯は徳を修めたので諸侯はみな湯に帰順した。そこで湯は兵を率いて征討軍を起こし、遂に王を討った。
- ロ 王は酒好きで淫楽を極め、妲己^{だつき}を寵愛した。……酒で池を造り、周囲の木々に肉を吊るし、裸の男女にその間を追いかけさせては、夜遅くまで酒宴を続けた。このため民は恨みを抱き、諸侯のなかには離反する者が現れた。
- ハ 王は褒姒^{ほうじ}を寵愛した。ある時、理由もなく烽火をあげると、諸侯たちはみな救援に駆けつけた。その様子を見て褒姒が笑うと、王は喜び、以後彼女を笑わせるためしばしば烽火をあげた。そのため西夷や犬戎が襲ってきた時、烽火をあげても誰一人助けに来る者はいなかった。

(2) 以下の文章で秦の始皇帝について記したものをひとつ選んで記号で答えなさい。

- イ 帝は驃騎將軍の功を褒め称えて、「驃騎將軍霍去病は軍を率いて匈奴を攻めたので、西域の渾邪王とその多くの兵はみな連れ立って降伏した」と言った。
- ロ 帝は匈奴を攻撃するに当たり、班超を西域に赴かせ、鄯善に至らせた。鄯善の王は最初彼を丁重に迎えたが、匈奴の使者が来ると途端に豹変した。
- ハ 帝は蒙恬に命じて30万の兵でもって戎狄を駆逐させた。蒙恬は黄河の南のオルドス地帯を手中に収めて長城を築いた。……当時の蒙恬の威勢は匈奴に轟いた。

(3) 以下の文章で秦の始皇帝のもとで宰相になった法家の言動について記したものをひとつ選んで記号で答えなさい。

- イ 昔の道を重んじて今の政治をそしめる者がいます。……このような状態を放置しておきますと君主の権威がなくなり徒党が発生しますので、これを禁止するのがよいでしょう。詩書や百家の書物はすべて焼き捨てさせましょう。
- ロ 彼は長さ3丈の木を都の北門に移した者には賞金を与えると布告したが、民は怪しんであえてやらなかった。そこで賞金を5倍にする布告を出すと、物好きがそれを実行した。彼はすぐさまその者に大金を与え布告が嘘でないことを示した。

ハ 竜という生きものはよく馴らすとそれにまたがることもできます。しかし、のどの下に直径1尺ほどの逆鱗があり、誰かがそれに触れたら必ず殺してしまいます。人主にも逆鱗があります。遊説者はそれに触れないよう心掛けねばなりません。

(4) 以下の文章で万暦帝の時代について記したものをひとつ選んで記号で答えなさい。

イ エセンが侵攻してくると宦官は親征を促した。廷臣たちはみないさめたが、帝は聞かなかった。……そのため軍は総崩れとなり、帝は捕虜となった。

ロ 倭寇は大挙して福建に侵攻した。温州から来た者は福寧などの諸倭と連合して、寿寧などを攻略した。……しかし、官軍はあえて攻撃しようとしなかった。

ハ 秀吉はその武将清正らを遣わし破竹の勢いで侵攻した。朝鮮軍は氣勢におされて総崩れとなり、国王は敵がソウルに迫ると王城を捨てて奔走した。

(5) 以下の文章で、万暦帝の時代に入京したイエズス会宣教師について記したものをひとつ選んで記号で答えなさい。

イ イタリア出身で、初めて中国の内地に入るも、各地を転々としたうえでようやく北京居住を許される。中国最初の世界地図を作成し、アジア人の世界観を変えた。

ロ ドイツ出身で、天文観測で名を挙げ、皇帝の命により中国暦法の改修や大砲の鑄造に従事する。のちに天文台長官に就任し、伝道の基礎を確立した。

ハ フランス出身で、ルイ14世の命で中国に渡り、皇帝に仕える。中国全土の大規模な測量を行い、中国最初の実測地図を作成した。